

私の太宰

太宰

その魅力

1

と思っていただけだった。太宰治の作品を初めて読んだのは、おそらく「走れメロス」が小学校の教科書か何かに載っていたのではなかつたろうか。

ともあれ彼の作品と簡単

な歴史にふれる機会があつて、私は太宰治という人が、

この津軽半島の、それも蟹田からさほど遠くない金木の出身であることを知つた。

なにぶんにも私は本州北端の半農半漁の小さな田舎町の野球少年である。町には大きな書店もなければ、両親もとくに読書家だつたわけでもない。作家といえれば、それこそ教科書などで目にする夏目漱石、森鷗外、

芥川龍之介といった名前しか知らない。私の日々の暮らしとはまったく無縁の存在である。

ところが、この太宰治という作家は金木の生まれで、彼の「津軽」という小説には、なんと蟹田のことが書かれているというではないか。私はさつそくその「津軽」という小説を手に入りして、当時五十年代だった「N君」と顔なじみだった「N君」と顔なじみだったのである。

て「津軽」を読んだ。

おまけに、この作品中に出てくる太宰の中学生時代からの友人「N君」は、観瀬山のふもとで駄菓子などを売る商店を経営し、私たちにして、こんなに面白い読物にすることができるのかと私は思った。

なれば大ロマンスが描かれているわけでもない。に通の人々の暮らしをテーマにして、こんなに面白い読み物にすることができるのかと私は思った。

暮らし描いても面白く



カット・津島園子

作家・太宰治が、津軽の地に生まれて今年で百年。生きることの喜びと苦悩、人間の善と悪とを鮮烈に描いた作品は、波乱に満ちたその生涯とともに、今も世界中の読者を魅了する。時代を超えて多くの人々を熱中させる太宰の魅力とは、さまざまな世代、分野の方々が語る。

父の仕事について青森県内各地を転々としていた私

たち一家が、母の故郷でもある蟹田町（現外ヶ浜町）

に腰を落つけたのは一九五九年（昭和三十四年秋の

こと）。私は七歳。小学二年生だった。この蟹田に住んだことが私の人生にかなり大きな影響をもたらすこととなつた。太宰治と出会えたからである。

蟹田小学校に通いはじめた私は、すぐにワンパク仲間もでき、放課後は毎日のように海辺や野山で遊びまわるようになつた。

学校の裏手のハイカラ山や、海辺の小高い丘である

奥濱が広がる。下北半島、夏泊半島、八甲田。そして蟹田の家並みを一望できる景勝の地である。

この観瀬山の頂の先端に鉛色の石碑が立つてゐる。

太宰治の文学碑で、「かれ

は、人を喜ばせるのが、何よ

りも好きであった！」と刻

まれている。だが、まだ小学

低学年だった私は、碑の説

明文にもろくに目を通すこ

ともなく、ただ観瀬山に太

宰治という作家の碑がある